観能のタベ

（石川県立能楽堂）

平成二十八年七月二日（土曜日）午後六時三十分開演

演目解説（金沢大学人間社会研究域教授　西村　聡）

狂言　柑子（こうじ）

昨夜のお呼ばれには三つ成りの柑子が振る舞われました。太郎冠者に持たせて置いた大名は、冠者を呼び出して柑子を受け取ろうとしますが、一つは槍に結い付けて落とし、また一つは懐に入れて刀の鍔で潰し、いずれも食べたと申します。残る一つにつき、冠者は哀れな俊寛の物語を聞かせます。鬼界が島の流人三人の内、二人は赦されて六波羅に、二つの柑子も冠者の腹に納まったのなら、島に残る俊寛分の一つはどうしたのでしょう。

能　加茂（かも）

播州室の明神（別雷命を祀る）に仕える神職（ワキ・ワキツレ）が御一体の都の加茂社へ参詣し、秋近い御手洗川で水を汲む女たち（前シテ・ツレ）に出会って、川辺に築かれた矢立ての祭壇のいわれを尋ねます。女はその矢が御神体であると述べ、昔この加茂の里に秦の氏女という人がいて、川上から流れて来た白羽の矢を夫として子を産み、親子三所が神と斎われた神秘（処女懐胎の縁起）を語ります。女はさらに加茂川の異名を数え、川の名尽くしの謡に興じながら、流れの尽きず濁りない水が神への手向けになるといって水を汲み、名を問われると「大君を守る尊い神」と答え木綿四手（白い幣）に紛れて隠れます（中入）。衆生の信心に感応あって神々影向の時が至り、まずは天女姿の御祖の神（後ツレ）が山川の緑に染まる涼しげな舞を披露し、続いて勇壮な別雷の神（後シテ）があたりを轟かして来現し、雷鳴と稲妻による五穀成就の神威を示して、大空に翔り去ります。

（西村　聡）

装束附　前シテ（里女）　鬘をつけ、鬘帯をしめ、泣増の面をかける。

後シテ（別雷神）赤頭をつけ、唐冠を頂き大飛出の面をかける。